

中東問題を観る眼

朝日カルチャーセンター・新宿教室

若林 啓史

講座の全体像

- 第1回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その1：ゾロアスター教
- 第2回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その2：ユダヤ教
- 第3回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その3：東方キリスト教
- 第4回 **イスラームは偏狭な宗教？ 寛容な宗教？ 中東の多数宗教・イスラーム**
- 第5回 中東は部族社会？ 中東の社会構造 その1
- 第6回 中東は宗派で分断されている？ 中東の社会構造 その2
- 第7回 中東は男尊女卑？ 中東とジェンダー
- 第8回 中東の国々はどこも産油国？ 石油問題と中東観のかたより
- 第9回 中東に民主主義は根付くのか？ 中東民衆の政治参加
- 第10回 イスラエルと湾岸アラブ諸国は手を結ぶのか？ 中東の新たな対立構造
- 第11回 日本外交における中東の重みは？ 中東外交の黄昏
- 第12回 なぜ日本の中東論文は英語で書かれるのか？ 戦後日本の中東研究

【中東地図】



第4回 イスラームは偏狭な宗教？ 寛容な宗教？

中東の多数宗教・イスラーム

2023年4月27日



写真 メッカのカアバ神殿（黒い四角の建物） 1884年頃撮影

メッカは、ヒジャーズ地方（アラビア半島の西海岸に相当）の中心地で、古くからシリアとイエメンを結ぶ隊商路の要衝であった。カアバ神殿は、イスラーム以前に遡る歴史を有し、当時はさまざまな偶像を祀っていたという。預言者ムハンマドは西暦629年末、イスラーム教徒を率いてメッカを攻略し、支配下に収めた。この時預言者は、カアバ神殿の偶像を破壊、唯一神への信仰を宣言した

1 イスラームをどのように理解する？

- 中東の少数宗教を眺めた後で、多数派を構成するイスラームについて考えます
- イスラームの少数宗教に対する立場、あるいはイスラーム世界の外における他宗教への態度に関し、「コーランか剣か」のような偏狭さを強調する議論が根強くあります
- 近年、衝撃的なテロ事件の発生に際しては、イスラームを掲げる集団の犯行と報じられ、イスラームそのものの暴力性・残虐性を指摘する見解を後押ししています
- 一方で、イスラームの他宗教に対する柔軟性や寛容を説く論者もあります。どちらが実態に近いのでしょうか？ 客観的に考察していきます
- さらに、我が国でも拡散している「イスラーム悪玉論」の正体を解明します



写真 メディーナの預言者モスク

預言者ムハンマドは、メッカ征服後もメディーナに居住した。西暦632年、預言者は生涯一度となるメッカ巡礼を行い、同年世を去った。彼は亡くなった場所に葬られ、後に墓廟を囲む「預言者モスク」（写真左）が建てられた。モスクの「緑の円蓋」の下には、預言者ムハンマドと初代カリフ・アブー・バクル、第二代カリフ・ウマルの墓がある。その横にはもう一人分の空地があり、イスラーム教徒はイエスが来臨して、その場所に葬られると信じている。中世以後の欧州では、ムハンマドの棺は空中に浮いているという伝説があった。1627年にアムステルダムで出版されたイスラーム批判書では、この伝説が改めて紹介され、磁力を用いた詐術であると解説が加えられている（写真右）

2 イスラームの他宗教に対する基本的立場

- ゾロアスター教の説明で言及したように、イスラームは他宗教を、唯一神を崇拝する宗教と、多神教に分けています
- イスラームは、多神教に対しては一貫して厳しい態度を採りますが、一神教、特に地域の先行宗教であるユダヤ教とキリスト教に対しては、イスラームと共通の神を信じる宗教という理解を示しています。一神教徒には、「啓典の民」という地位が認められました
- イスラームの支配下に入った「啓典の民」は、その支配を受け容れ、貢納などの条件に従うことで、従来の信仰を続けることが許されました
- また、ペルシアを征服したイスラーム帝国は、ゾロアスター教徒を「啓典の民」に準じて処遇しました
- ウマイヤ朝イスラーム帝国はインドの一部を征服し、ムガル帝国（1526-1857）の皇帝たちはイスラーム教徒でした。イスラーム支配下のヒンドゥー教徒は、平穏に暮らしていました。当時のイスラーム法学者には、ヒンドゥー教を多神教と非難する者もありました
- こうしてみると、多神教徒に対する厳しい態度は理論面に限られ、征服地の実際の統治にあたっては、他宗教に手を出さない慣行が成立していたようです
- クルアーンには、「汝らには汝らの宗教、我には（我が）宗教」（「不信仰者たちの章」6節）という章句があり、イスラーム以外の宗教を許容する姿勢がみられます



写真 エルサレムの「岩のドーム」と「アクサー・モスク」

金色の屋根を持つ「岩のドーム」は、ウマイヤ朝イスラーム帝国のカリフ、アブド・アルマリクが691-692年に建立したモスクである。エルサレム旧市街、ユダヤ教徒が「神殿の丘」と呼ぶ高台に位置する。建物の内部に、神が世界とアダムを創造した場所とされる巨大な岩がある。「岩のドーム」の手前に、「アクサー・モスク」が見える。624年まで、イスラーム教徒は、メッカのカアバ神殿ではなく、エルサレムに向かって礼拝していた。エルサレムは、イスラームにおける聖地でもある

3 イスラームとキリスト教の寛容・不寛容

- イスラームが、ユダヤ教徒やキリスト教徒を「啓典の民」として社会に組み込み、征服地のゾロアスター教徒やヒンドゥー教徒とも共存したのに対し、同時代のキリスト教徒は、異教徒にどのような態度を採ったのでしょうか？
- ウマイヤ朝カリフの異母兄弟であった、マスラマ・ブン・アブド・アルマリクは717年から翌年にかけて、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを包囲しました。この時、コンスタンティノープルに建てられたモスクは、その後約500年、東ローマ帝国によって存続が認められました。しかし1204年、十字軍による略奪の際、破壊されたといえます
- 一方、イングランドでは1290年、フランスでは1306年、ユダヤ教徒住民の追放が行われました。イベリア半島は、711年以来イスラームの支配下にありましたが、カトリックの君主による再征服が進行すると、1391年には反ユダヤ暴動が発生しました。1492年、グラナダが陥落するに及び、イスラーム教徒やユダヤ教徒はスペインから追放されました



写真 ダマスカスのウマイヤ・モスク

西暦613-614年、東ローマ帝国領であったシリアに、ササン朝ペルシア帝国ホスロー2世の軍が攻め込み、ダマスカスとエルサレムを包囲した。この時、エルサレムからは、イエスが磔刑に処せられた「真の十字架」が奪われたと伝えられる。東ローマ帝国は、シリアを奪い返したが、今度はアラビア半島から興ったイスラーム帝国に攻略された。635年、イスラーム軍はダマスカスを占領した。ダマスカスに留まったキリスト教徒は、「啓典の民」の処遇を受け、信仰の保持が認められた。当時の大聖堂は、キリスト教徒に委ねられた。ウマイヤ朝イスラーム帝国のカリフ・ワリード1世は706年、大聖堂を接収し、モスクに改築した。ウマイヤ・モスクには、ゼウス神殿や大聖堂の遺構が重層的に残っている

4 異教徒に対する「ジハード」

- 「聖戦」と訳される「ジハード」の語は、クルアーンに動詞・名詞合わせて41回出てきます。ただし、武力行使の意味だけでなく、議論や正しい行為による闘争の意味でも用いられています
- イスラームの暴力性を批判する人は、クルアーンの「彼らを見つけ次第殺し、汝らを追い出した場所から彼らを追い出せ」（「牝牛の章」191節）などを例証としています
- しかし、直前の章句「汝らに戦いを仕掛ける者どもに対し、アッラーの道において戦え。限度を越えてはならぬぞ、アッラーは度を越した者を好まれぬ」（「牝牛の章」190節）という、限度ある報復の文脈から切り離されています
- 全ての宗教には、聖典などの文献と共に、手続に従って聖典を解釈し、現実への適応を図る宗教専従者がいます。聖典からの恣意的な引用は、誤解を招きがちです



写真　　ダンテ『神曲』に登場する預言者ムハンマド　14世紀後半の写本
 欧州におけるイスラームへの恐怖と憎悪は、文学作品に反映している。フィレンツェ出身の詩人ダンテ（1265-1321 図の左端）は、『神曲』の中で、ローマの詩人ウェルギリウス（左から2人目）と共に地獄を訪れる設定で、ムハンマド（同3人目）と第四代カリフ・アリー（同4人目）を描いている。「我は彼を見んとてわが全心を注ぎゐたるに、彼我を見て手をもて胸をひらき、いひけるは、『いざわが裂かれしさまをみよ、マホメットの斬りくだかれしさまをみよ、頤より額髪まで顔を斬られて歎きつゝ我にさきだちゆくはアリーなり、そのほか汝のこゝにみる者は、みな生ける時不和分離の種を蒔けるものなり、この故にかく截らる』」

5 「ジハード主義」の発生

- ここまでの説明では、イスラームが穏当な宗教という指摘に留まり、イスラーム過激派による残虐なテロ行為とどうつながるのか、理解できないとの疑問があるかも知れません
- そこで、1988年に国際的聖戦を目的として創設された「カーイダ組織」の理論的支柱「ジハード主義」を知る必要があります
- イスラームの伝統的解釈では、高度な政治的・軍事的判断を伴う聖戦は、カリフあるいはイスラーム法学者代表の宣言と、実行にあたっての指揮者が必要とされていました
- つまり、伝統的解釈における聖戦遂行は、国家レベルの行動であり、個々のイスラーム教徒による聖戦開始の判断は、封じられていました
- しかし、「ジハード主義」を唱える人々は、聖戦を不信仰者の土地で行う「攻撃的聖戦」と、ムスリムの土地で行う「防衛的聖戦」に分け、後者は信仰そのものに次ぐ無条件の義務であるとして、個人単位の聖戦遂行を主張しました
- さらに、「ジハード主義」からは、聖戦の場所を限定しない「国際ジハード主義」の思想が派生し、世界各地における「イスラームの敵」への攻撃を正当化しました
- このように、「ジハード主義」は、イスラームにおける異教徒への伝統的な対処のあり方から既に乖離しており、大多数のイスラーム教徒はこれを支持していません



写真 『悪魔の詩』への抗議 テヘランで1989年2月17日撮影

英領インドのムスリム家庭に生まれたサルマン・ルシュディーは、イギリスに移住、無神論者に転向した。1988年、彼が『悪魔の詩』を出版すると、この小説に預言者ムハンマドやクルアーンへのあてこすりが含まれるとして、イスラーム世界から激しい非難が生じた。ホメイニーは1989年2月、ルシュディーや出版に関わった者は死刑に値し、世界の勇敢なムスリムたちに彼らの殺害を呼びかけるとの法的見解を明らかにした。イギリスとイランは同年3月、大使館をそれぞれ一時閉鎖するなど外交問題に発展した。表現の自由に名を藉りた挑発と、これへの暴力的反撥という応酬は、デンマーク日刊紙のムハンマド風刺画（2005年）、フランス『シャルリー・エブド』新聞社襲撃（2015年）で繰り返された。2022年8月、ルシュディーはニューヨークで襲撃され、片眼失明・片腕の自由を失う重傷を負った

6 「タクフィール思想」とは何か？

- 「ジハード主義」と共に、イスラームそのものへの曲解を増幅した要因には、「タクフィール思想」（異端排斥）の先鋭化が挙げられます
- 「タクフィール思想」は、「ジハード主義」より根が深く、14世紀前半のイブン・タイミーヤが、十字軍やモンゴルの脅威に直面して提唱したイスラーム純化運動に遡ることができます。イブン・タイミーヤは、イスラーム共同体の危機を宗教的退廃の結果と捉えました。彼は、当時の王朝や既存のイスラーム諸学派を、イスラームから逸脱していると排撃し、自らの考えに従わないイスラーム教徒への聖戦を認めたとされます
- イブン・タイミーヤは、イスラーム共同体の分裂を引き起こすと非難され、投獄されました。その後、彼の教説は、サウジアラビア建国の母体となったワッハーブ派や、エジプトのムスリム同胞団から分かれた急進的集団に受け継がれました。そして、「タクフィール思想」の信奉者は、「異端者を異端排斥しない者は、異端者である」という標語を掲げ、一般市民多数を殺戮するなど、過激化しました
- 「タクフィール思想」は、大多数のイスラーム教徒により、批判されています



写真 シリア領内の「イスラーム国」戦闘員 2014年撮影

湾岸戦争（1991年）における米軍のサウジアラビア駐留に刺激され、国境を越えたジハード（聖戦）を主張するビン・ラーディンらの「国際ジハード主義」が抬頭した。アフガニスタンとイラクにおける対テロ戦争に反撥する形で、国際ジハード主義者の一部はさらに過激化した。イラクに侵入したザルカーウィー（1966-2006）の集団は、大規模な爆弾事件を引き起こした。「イスラーム国」は、イラクで結成された組織から発展し、「アラブの春」で生じた混乱に乗じて、シリアに拡大した。2014年、「イスラーム国」の旗挙げとカリフ制の樹立が宣言された。「イスラーム国」は、一時イラクとシリアにまたがる広大な地域を支配したが、米露の軍事介入を受け、2017年末までに急激に勢力を失った

7 欧米の反イスラーム感情と日本の「イスラーム悪玉論」

- イスラームは、キリスト教が同じ一神教であると親近感を示し、クルアーンには「イーサー」（イエス）や「マルヤム」（マリア）も登場します
- これに対し、キリスト教徒の側は、イスラームの生誕直後から、これを異端の一種に認定し、ムハンマドとクルアーンを預言者・聖典とみなすことを拒絶しました
- さらに、ウマイヤ朝イスラーム帝国にピレネー山脈まで攻め寄せられ、聖地回復を目指した十字軍はマムルーク朝に斥けられ、オスマン帝国にウィーンを二度も包囲されるなど、欧州の人々には、イスラームへの恐怖と憎悪が植え付けられました
- 欧州キリスト教徒の反イスラーム感情は、時代を超えて受け継がれ、アメリカに拡がりました。現代でも、反イスラーム感情は、ムハンマドやクルアーンへの中傷の形で表出することがあります。急進化したイスラーム教徒の一部が、これら挑発に暴力的に反撥する事件が繰り返され、あたかもイスラームそのものが危険であるように喧伝されました
- 日本は、イスラームとの宗教的・政治的対峙の歴史とは無縁であったはずですが、しかし、対テロ戦争の頃から、欧米起源の反イスラーム論を無批判に受け売りする者が、日本にも出現しています。最近ではむしろ、イスラームへの偏見が拡散の様相を示しています